

「言語による時間生成」論文集・報告集

はじめに

プロジェクトが始まって5年が経過した。言語を通して人間の時間認識を知るという、本研究「言語による時間生成」の中心的な試みは今どの段階にきているだろうか。

「言語による時間生成」は、新学術領域研究「時間生成学——時を生み出すところの仕組み」(研究代表：北澤茂)のA01計画班の研究課題である。領域全体は総括班ほか、5つの計画班から成り、さらに前期・後期合わせて31の公募班が参加した。本領域は神経科学の研究者を中心に、言語学、哲学、情報工学、心理学、認知科学、臨床医学、比較行動学などの研究者が参加した複合領域である。若手研究者の活気、分野を超えた活発な議論と交流が印象的だった。計画班代表は、北澤茂先生(B01班)、田中真樹先生(C01班)、平田聡先生(D01班)、池谷裕二先生(E01班)。おもしろくならないわけがない。

本班「言語による時間生成」は、言語学、哲学、計算言語学、情報工学を専門とするメンバーから成る。研究代表・分担者4名と、プロジェクト雇用の研究員を含む研究協力者19名が関わった。領域全体においては時間を生成する人工神経回路の構築というミッションを担いつつ、それぞれの学域の研究分野においても時間に関する研究を深化させてきた。さらには、神経科学、比較認知科学、発達心理学の各分野の研究者との共同研究による論文、図書等も公刊されている。

本誌は、時間生成学A01計画班「言語による時間生成」の論文集・報告集である。とはいっても、活動報告にはその内容がすべて記録できているわけでもなく、輪郭を表すのがせいぜいといったところである。多くの成果はすでに論文や本として公刊されているし、さまざまな研究活動は中身——時空間の共有——にこそ意味がある。

本誌には新学術領域の「新」の部分における試行錯誤の足跡が残されている。研究員たちの活躍も、時間研究の時間の楽しみも、少しは刻まれている。活動の積み重ねのなかで育まれるもののあることを感じてもある。こうした研究が代表者や分担者だけでなく、ポスドク研究員、大学院生、学部生、さらには、「時間言語フォーラム」等の研究会やいくつかの図書などを通して、一般にも広がりをもちつつあることは、本プロジェクトの一つの到達である。

本誌は研究論文と活動報告から成る。研究論文には、「言語による時間生成」のうち、とくに言語学分野の成果論文が投稿された。ここに掲載された4篇の論文は、協力者を含むA01班メンバーで匿名での査読を行い、査読コメントをもとに改稿するというプロセス経たものである。本研究の成果の一部としてここに公開する。研究報告集としては、A01班の研究活動を整理し、関連資料を3篇含めた。領域会議、班会議だけでなく、若手研究者をまきこんだ研究会、研究グループが本科研プロジェクトを通じていくつか立ち上がった。未来の研究へと続く萌芽を垣間見ることができるかもしれない。

iii頁は「言語による時間生成」のメンバー一覧である。立ち上げのときから頼りなかった研究代表の私とともに研究を進めてくださった、青山拓央先生、浅原正幸先生、小林一郎先生、そしてさまざまに研究を支えてくださった研究協力者のみなさまに感謝する。A01班は専門分野がさまざま、思い返せば、最初は互いの分野の基本的知識を共有するところから始まった。工学的な知識のまったくなかった私に、メンバーは丁寧に説明を重ねてくれた。本班は哲学、言語学の人文科学を含む班でもあり、神経科学を中心とする領域にあってそのあり方ややり方を考えたり、試したりもした。複合領域の研究を支えるのはまずもって、それぞれの研究者のそれぞれの分野における確実な研究基盤であり、それぞれに成果をあげつつも、さらなるコラボレーションで新たなものを生み出していけるところ、それが自由にできるところに新学術領域研究のおもしろさがあった。他分野との出会いのなかで得たものはこれから先も、それぞれの研究のなかに生きてくるのだろう。そして、それらが広がりをもてば、複合領域の研究はひろく学術全体を豊かにすることだろう。

本誌は、明海大学の本プロジェクト研究員である、鍛治広真、Joseph Taboltがいなければ作成されることはなかった。時間をテーマとする複合領域プロジェクトにおいて、言語学にできること、言語学が取り入れられることを模索し、試行錯誤する日々であって、彼らに支えられたことは多い。ともに「時間と言語」を考えた時間とさまざまな思考交換の確かさをいま感じている。

2023年11月

「言語による時間生成」研究代表

嶋田珠巳